

天理教教理における海外伝道について (2)

『おさしづ』における海外伝道について

前回 (2021 年 11 月号) では、台湾にまつわる「おさしづ」の中で、異文化社会における伝道に関するものを取り上げて紹介したが、今回は、海外伝道の心得、心構えについての「おさしづ」を紹介したい。どちらの「おさしづ」も、山名大教会による組織的な台湾伝道の黎明期に頂いたお言葉である。

山名大教会初代会長である諸井国三郎は 1840 年 (天保 11) に現在の静岡県袋井市で生まれ、三女の身上から入信した。1888 年 (明治 21) には山名分教会を設立し、その 5 年後には遠国といわれた東北各県へ手分けして布教した。さら 1897 年 (明治 30) には 56 歳で台湾伝道を自ら指揮し、ほかの役員らを布教師として伴い、台湾へ渡った。

まず、台湾への布教と、その資金的後ろ盾となると考えた殖産興業について伺った「おさしづ」が残っている。

さあ〜尋ねる事情〜、さあ尋ねる事情には、これまで遠い話にも聞いて居る。事情一時以て尋ねるは、遠い話には、一寸追々の理ともいう。身上に一つの事情無ければ、何時なりと。さあ速やか許し置こう〜。

これに引き続いて、諸井国三郎が 20 日頃に行く事について伺ったところ、

さあ〜心得に委せ置くによって身上も壮健、皆々勇んで心事情、心一つ嬉しい。真実心理を以て鮮やかなら、何時なりと許し置こう〜。(明治 30 年 6 月 5 日)

との「おさしづ」を頂かれた。遠く離れた台湾において布教するには、身に現れてくる姿、つまり身上に事情がなければ、いつでも進めよとのお言葉である。さらに、速やかに許し置こうというお言葉に、遠く離れた海外へも天理教の教えが早く広まることを心待ちにされる親心を感じる。また、ともに布教に携わる者がみんな勇んで心を合わせることを嬉しいと感じ、教えを広めたいという真実の心が鮮やかであるならば、何時でもよいとの心強い神の言葉である。

ところが、国三郎がいよいよ台湾へ向けて出発という時に、予期せぬことが発生する。出発の前日、つまり 7 月 13 日の夜、分教会では役員、部内の主だった人々が集まり、台湾布教のお願いに十二下りのおつとめが勤められた後、送別の宴席の最中に、3 歳になる国三郎の 6 女なつのが激しい引きつけを起こした。居合わせた人々は動揺したが、その場を鎮めるように国三郎は、「たとえこの児が死んでも、明日は出発するから、後で葬式をなささい。どんなことがあっても嘆くではない。定めたからには、台湾で死んだら生れ替わって来ても、台湾で必ず道をつけるから、お前もしっかり心を定めていなさい」と夫人に言い渡した。命懸けで台湾伝道に取り組む姿が目に見えようである。

ここでは、会長として自らが先頭に立って台湾へ教えを広めたいという責任感が現れている。それと同時に、国三郎のこの決意の言葉は、上述の「おさしづ」の内に力強い神の力添えと勇み心を感じ、そのお言葉にもたれきり、わが命を捨ててもという神一条の真実の心を定めることを神が望んでいるとの悟りから発せられたようにも感じられる。

さて、翌 7 月 14 日、袋井駅は教会関係の人や近郷の人たちの見送りで埋まった。四斗樽のお鏡が抜かれ、壮行の歓声さんざめく中で、人の腕に抱かれて見送りに来ていたなつのが再び引きつけを起こした。「この児が死んでも、決して沙汰をするな」と国三郎は言い残し、途中、名古屋で下車し、愛知支教会に立ち寄って、同行の者とともに洋服を購入し、おぢばへ向かった。そして朝、出発前日を当日に 6 女なつこの身に起こった突然の身上について「おさしづ」を伺うこととなった。

さあ〜尋ねる事情〜、前々事情速やか許したる。だん〜よう〜の道を調べ運んで、さあという一時の際、小人身上心得んという。心得んから尋ねる。尋ねるから諭そう。よく聞き取れ〜。国を立つ一時多くの中楽しみもあれば、又中にほっと思う者もある。よう聞き取れ。道のため教一つの理を聞いて定めた精神一つの理は末代という。この理をしっかりと心に治め、辺所立ち越す処、勇んで〜。どういふ事もこういふ事も、一度定めた理は末代の理という。さあ〜皆々それ〜治めてくれ。

さらに永井藤平同行の願いで、

さあ〜精神さえこうと言え、明らかなもの。こうという精神あるなら、勇んで勇んで。さあ〜皆んな心に委せ置こう。(明治 30 年 7 月 16 日 朝)

とのお言葉をいただいた。

今回の台湾伝道についてはすでに速やかに許されており、いろいろと準備を進めてきたが、突然 6 女に現れた身上患いをどのように悟ればよいかというなら、これから出発という時に楽しみもあれば、「ほっと思う」者もいるだろう。一度定めた「心の理」は末代まで続くものとして、いろいろなことが起ころうとも勇んで取り掛かり、この決意が末代まで続くということをしかり心に治めて台湾伝道に取り組むように、との励ましのお言葉である。つまり、いまだ状況もはっきりとわからない未知の布教先である台湾において、命懸けで布教に取り組むと心に定めたなら、その決意は末代に続く「理」として、国三郎だけでなく、山名につながる人々へと引き継がれるものである。それゆえ、どのような事にも動じることなく、勇んで取り組むことが海外伝道において大切である。このことを改めてお諭し下さったお言葉であり、温かい親心が感じられる。